

## P2-30-7 研修医ならびに医学生のアナケート調査から見た若手産婦人科医師獲得に向けた戦略

埼玉医大

木村真智子, 難波 聡, 三木明德, 岡垣竜吾, 亀井良政, 石原 理

【目的】産婦人科入局者数は漸増傾向の後に減少傾向にあり, 入局者増員は喫緊の課題である. アンケート調査から若手産婦人科医師獲得に向け考察を行った. 【方法】4年生から6年生の本学医学部学生321名と初期研修医38名を対象とし, 自身の性別および年齢層をもとに, 自身の専攻科を選ぶ際の優先項目, 将来産婦人科を選択する可能性(0%, 10%, 30%, 60%, 90%のいずれかから選択), 産婦人科で働く上での魅力, 産婦人科になりたくない理由について調査を行った. 【成績】専攻科を決める際の優先項目は, 自分の興味が圧倒的に高く, 次いで分野の将来性, 社会におけるニーズの順であった. 30代前半までは専攻科を決定する際に家族・両親の診療科よりも自分の興味が優先する傾向が非常に強く, また年齢が低いほど社会におけるニーズを意識していた. 将来産婦人科を選択する可能性は女子学生・女性研修医の方が男子よりも高く, 学年を経るごとに減少していた. 産婦人科で働く上での魅力は, 「やりがい」「内科と外科が両方できる」の順であった. 産婦人科医になりたくない理由は「訴訟が多い」が最多で, 次いで「自分の時間が持てない」であった. 将来なる可能性が高いグループでは「モデル医師がない」「実家が他の科だから」を選択していないことが他のグループとの違いであった. 【結論】将来産婦人科を選択する可能性30%~60%と回答する学生・研修医の確保が今後の課題である. そのため医学生の早い段階から, 産婦人科医の社会におけるニーズをアピールすること, 産婦人科関連の医療訴訟を含めた現状を正しく教えた上で将来の展望を示すことが自身の興味を維持する上でも重要な要素であると思われた.

## P2-30-8 卒前卒後の産婦人科系シミュレーション教育の実態とその評価

大阪市立大<sup>1</sup>, 大阪市立大スキルズシミュレーションセンター<sup>2</sup>森村美奈<sup>1</sup>, 寺田裕之<sup>1</sup>, 小西雅美<sup>1</sup>, 羽室明洋<sup>1</sup>, 中野朱美<sup>1</sup>, 橘 大介<sup>1</sup>, 尾崎宏治<sup>1</sup>, 榎本小弓<sup>1</sup>, 奥 幸子<sup>2</sup>, 角 俊幸<sup>1</sup>, 古山将康<sup>1</sup>, 石河 修<sup>1</sup>

【目的】当大学では, 卒前卒後の医学教育に各科が日常的に, 当院 Skills Simulation Center (SSC) を利用している. そこで, 今回は産婦人科系シミュレーション実習の現状について報告するとともに, それらの実習が, 受講者および指導者にもたらす影響について検討した. 【方法】当院 SSC において開催した産婦人科系シミュレーション医療実習の概要を示し, 各実習時に行われた無記名アンケート調査をもとに検討を加えた. 【成績】2007年度より研修医や希望する医学生に対し「女性診療手技実習」として, 教員による内診と乳房触診の講習会を開始した. その後, 2010年よりそれらを1年目研修医に義務化し, 2年目研修医を中心としたインストラクターによる実習とした屋根瓦方式を取り入れた. さらに24年度から胎児超音波や分娩介助などの産科シミュレーションも取り入れた. 一方で, Bed Side Learning (BSL) においても2010年度より鏡視下外科手技, 2013年より産科手技BSLを取り入れた. 鏡視下外科手技講習会では, 本年4月から9月の学生による指導者の100点満点での評価では, 平均96点・中央値100点と高かったのに比し, 学生の自己評価は範囲が99.8-45点とばらつきがみられた. 産科手技BSLでは, “実習が今後役立つか?”の問いには, 87%が“とても役立つ”13%が「役立つ」と答え, “実習後の産科に対する興味は?”には, 74%が「増した」26%が「非常に増した」と答えた. 【結論】産婦人科領域におけるシミュレーション教育は, 実習者・指導者両方からの評価が高く, 指導者のスキルアップにも貢献し, さらには学生や研修医の産科医療に対する興味を高めることにも役立つ可能性が示唆された.

## P2-30-9 近隣三県の大学病院産婦人科による合同カンファレンスの成果

熊本大<sup>1</sup>, 大分大<sup>2</sup>, 宮崎大<sup>3</sup>大場 隆<sup>1</sup>, 奈須家栄<sup>2</sup>, 古川誠志<sup>3</sup>, 楢原久司<sup>2</sup>, 鮫島 浩<sup>3</sup>, 片瀧秀隆<sup>1</sup>

【目的】文部科学省の医療人養成推進事業の一環として, 近隣3県の大学病院産婦人科による合同カンファレンスを行い, 専門医育成と共に研修医・学生のリクルートを試みた. 【方法】平成21年から24年の4年間に計4回の合同カンファレンスを行った. 開催は土日曜の2日間で, 前半2回は県境近くの民間施設を利用した合宿形式, 後半2回は医学部附属病院臨床研修センターにおいてシミュレーター実習を中心とした研修とした. 3大学の専攻医に加えて学生, 初期研修医の参加を勧奨した. 各カンファレンス終了後に無記名アンケートを行った. また参加者の専門医取得状況および進路を平成25年8月時点で調査した. 【成績】参加者のべ人数は教員37名, 専攻医41名, 研修医・学生35名で, 教員以外で複数回参加した者は12名あった. 初回参加の時点で初期研修医であった19名のうち, 初期研修を終えた12名中5名は出身大学の産婦人科を選択した. 前半2回の終了後アンケートでは, 翌年も参加したいと答えたのは専攻医15名中11名, 研修医・学生13名中10名であったが, 後半2回では, 回答した専攻医13名, 研修医・学生15名すべてが翌年も参加したいと答え, またこの会に研修医・学生を参加させることは産婦人科医師増加に効果があるだろうと答えた. 郊外での合宿形式, 他大学医師との相部屋は教員には好評であったが専攻医, 研修医には不評であった. 【結論】医学部附属病院の臨床研修センターを利用した, 近隣三県の産婦人科合同カンファレンスは低経費での開催が可能で, 卒後臨床教育としての効果に加えて, 若手医師の交流, 研修医や学生のリクルートにも有益と考えられた.